1−8−2　芸術系

教育・アート

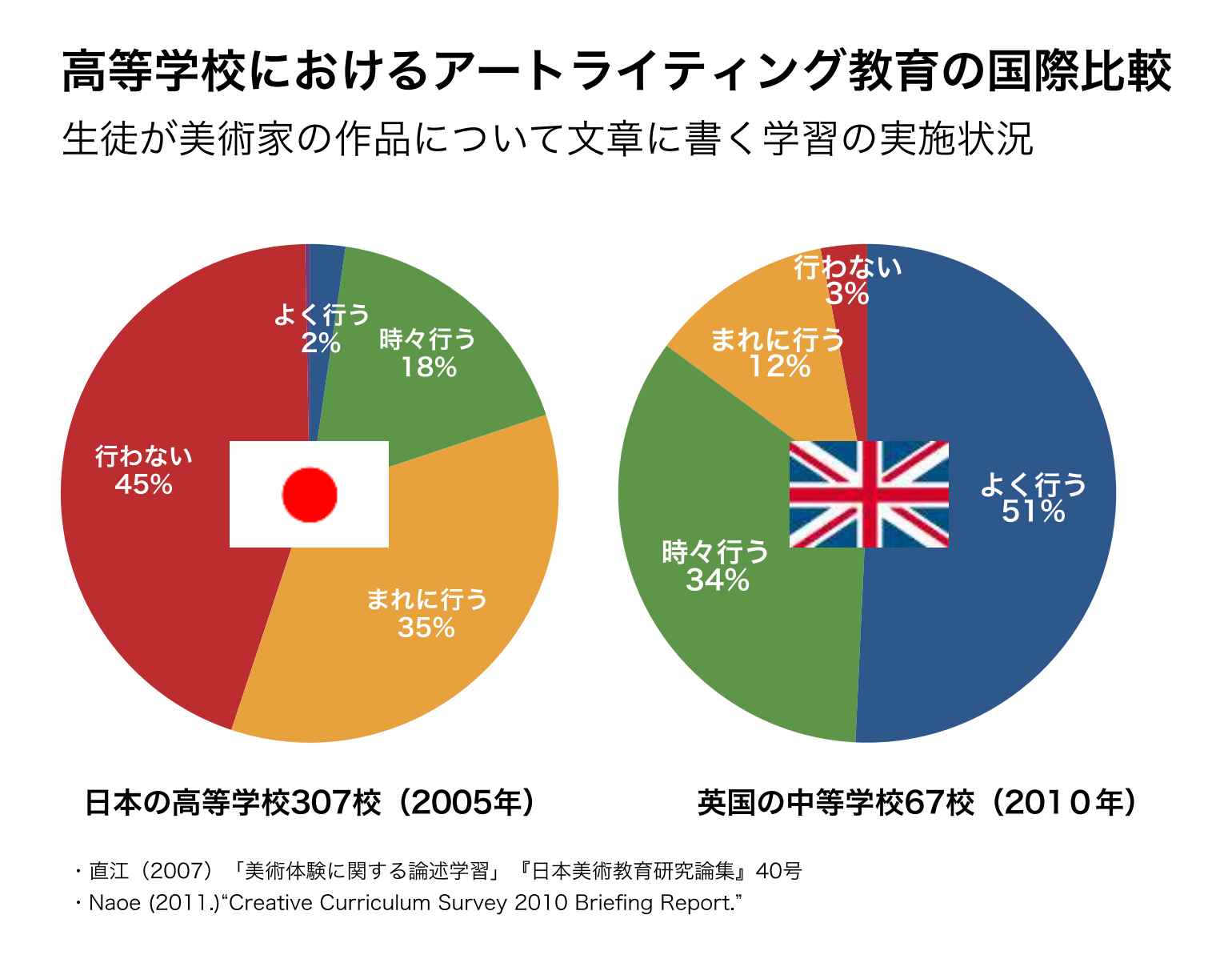
アートライティング教育の国際展開

芸術系　　教授　直江 俊雄

アートに関するエッセイのコンテスト、高校生アートライター大賞に英語部門を新設して国際化を図り、日本から世界に向けて新しい芸術教育を展開する。

① アートライティング教育とは

学習者が文章執筆を通して、自己の芸術体験について、より深くとらえ直すことによって、芸術的な価値観やものの見方をその後の生き方に活かせるよう支援すること。

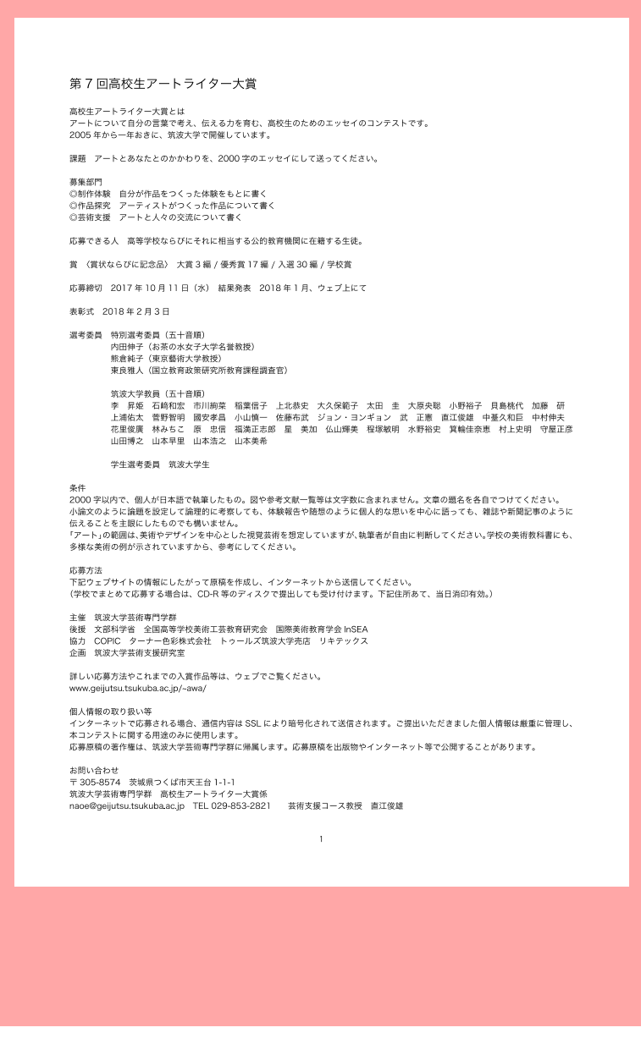


・直江（2007）「美術体験に関する論述学習」『日本美術教育研究論集』40号
・Naoe (2011.)"Creative Curriculum Survey 2010 Briefing Report."

② 高校生アートライター大賞とは

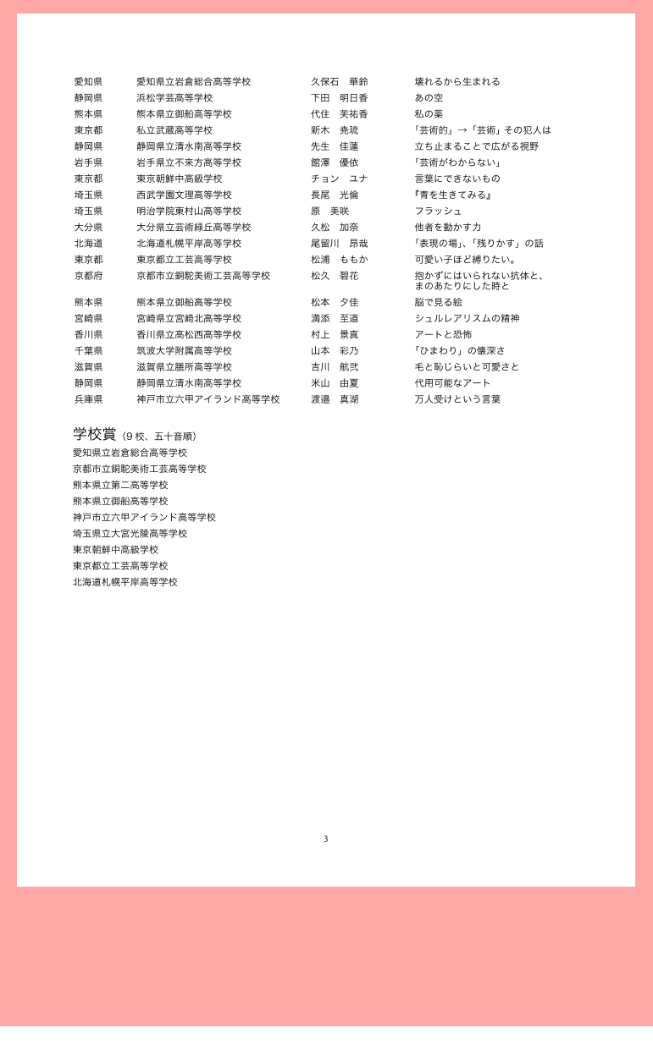
筑波大学が主催する、アートに関するエッセイの高校生コンテスト（世界初）。
前回は日本を含む13か国から551編の応募があった（海外からは19編）。

Art Writer Award for High School Students
Watashi wo Butsukero.
わたしを、ぶつけろ。
アートとあなたとのかかわりを、2000字の文章にして送ってください。
高校生アートライター大賞
筑波大学
University of Tsukuba



第７回高校生アートライター大賞

第７回高校生アートライター大賞　選考結果



③ 高校生によるアートライティング

2017年度　大賞受賞作品より

ゴミはゴミ箱　髙橋菜々子

「俺は友達なんていらない。宿題を見せてくれるヤツがいればそれでいいよ。」

これは私の友達が真顔で言い放った言葉だ。余りにも自分本位が過ぎたこの言葉にコイツは紛れもなくクズだなと思って引いてしまったが、妙に自分の心にピンと来るものがあった。

大量生産、大量消費。これは現在の日本の形態である。百円均一の商品を顕著な例として、ボールペンや傘、服など様々なものが数度使っては捨てられている。けれど、何もモノに限ったことではないのではないか？巧妙な手口でお金を吸い取られる詐欺の被害者、上司に責任を押し付けられて首を切られる部下、身勝手な理由で遺棄される乳児。モノを軽々しく捨てる人間が、逆に軽々しく切り捨てられることもある。私たち人間は生きている限り、誰かにいいように使われて、必要とされなくなれば容赦なく切り捨てられる可能性を秘めて生きているのだ。友達の発した言葉は、『人間もモノも根本的には同じ、生活を豊かに・楽にするもので必要なくなれば捨てることができる。』という一つの結論を導いてくれた。

『使い捨て女子高生』はこの考えの延長から生まれた作品だ。女性は流行に敏感で、様々なものに手を出すが、すぐに飽きて見向きもしなくなる。写真を撮るためだけに購入され、口を付けずに無残に捨てられる食べ物が社会問題になっている「インスタ映え」への拘りも、使い捨てに近いものがある。世の中には大勢の女性がいるが、その中でも高校生は突出して酷い。女子高校生は本気で友達を捨てることが多々ある。いじめがその最も酷い例だ。いじめる対象がいなくなれば、一緒にいた自分の仲間でさえ、新たないじめの対象に仕立て上げてしまう。私はそんな女子高生達に自分の置かれている状況を自覚してもらうべく、ゴミ袋で服を作り上げた。

「あなた達はいつ捨てられるかもわからないんだよ。」なんて。

女性は、同性だけではなく異性から捨てられることも多い。結婚詐欺の被害に遭い、別の女性と浮気をされて離婚を迫られる。望まない妊娠をしてしまった若い母親が、夫からの金銭的支援を受けられずにシングルマザーに…と、女性は結婚というイベントに関わって何かと捨てられることが多い。それならばいっそのこと、捨てやすいようにしてやろうと、ゴミ袋でウエディングドレスを作ろうと決意した。

ゴミ袋で服を作るのはかなり難しい。糸を引く力でビニールが破れてしまうため、ミシンは使えない。手縫いの力だとビニールが伸びて針は上手く刺さらない。さらに困ったことに、シワ伸ばしや印付けのためにアイロンをあてられないし、布と違い一度針で穴を開けてしまえば穴は開いたままになってしまう。そのため、裏地と表地の位置や針を刺す角度など細かく確認しながらの作業になる。手縫いのために進みが遅い。普通に洋服を縫う数百倍神経を磨り減らす精神的に辛い作業の繰り返しだが、手元のゴミ袋がドレスとして少しずつ形を成していく過程は気持ちの良いものである。

しかし、一時期その作業がどうしても苦痛な時があった。製作途中のドレスのパーツがほんの一瞬のうちに捨てられてしまった時のことだ。まさか自分の作品が捨てられてしまうなどと考えていなかった私は、大変なショックを受けた。幸いにも、無くなったその日のうちに新しく無くなったパーツを揃えることができた私は、そこまで大幅な遅れにはなっていないからと気持ちを切り替えて続きに取り掛かろうとした。しかし、自分の作品がゴミと認識されて呆気なく捨てられてしまった事実から、私はこれ以上制作を続けても周りから作品とは認められない、ゴミしか作れないのではないかと思った。それからしばらくは縫えば縫うほど心が虚しくなり、作業に熱が入らなかった。

今回の私の作品は『使い捨て』、詳しく言えば『人間もモノと同等に扱われ、簡単にゴミとなる』ということがテーマだったため、完成形から見えこそしないが、アクシデントそのものも作品の一部なのだと考え、作品の中に取り込んでしまうことにした。それからは紛失が起こる以前のように作業ができるようになったが、自分がどれだけ傑作と思っている作品も、周りの人間が作品だと認識していなければ、結局それは無価値なのだと痛感した。だが、私は自分が表現したいこと全てを表現しきれていない作品こそ、真に無価値で無意味な作品であると強く思う。だから私は、（授業作品としての評価を含め）他人からの評価を気にせず、自分の思うこと、考えたことを全て作品に反映できる表現者になりたい。

「見る」ということ　細田詩織

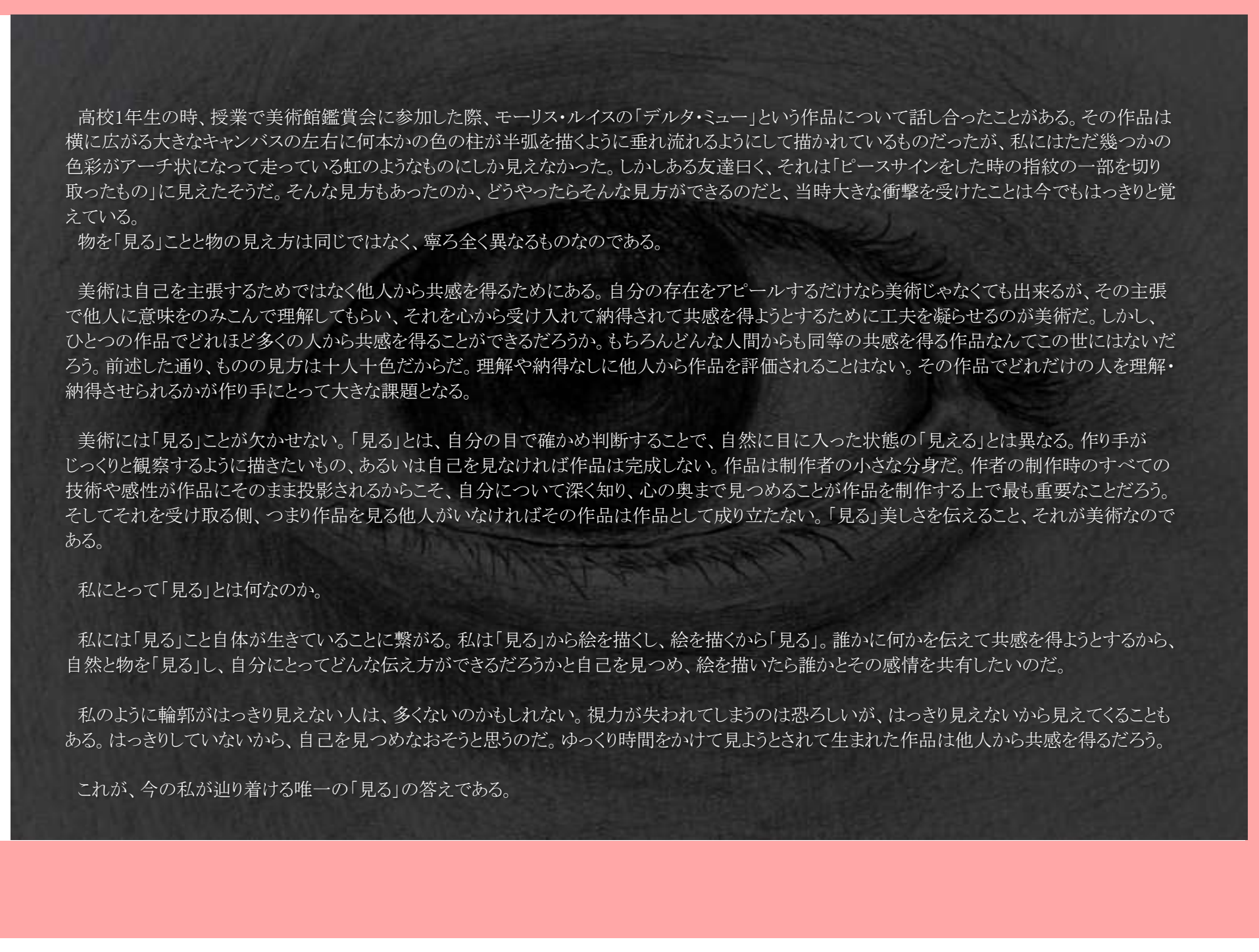
「見る」とは何なのか。私は他人よりもそれについて熟考する時間がたぶん多いが、未だに真相には辿り着いていない。

3歳頃から近視によって私の視力は低下傾向にあった、と母は言う。その後近視が進行し、現在では眼鏡無しでの生活はできないほどの深刻な状況にある。近視とは、眼の水晶体の焦点距離が短すぎる、あるいは網膜に至る距離が長すぎるために鮮明に物を見ることができない状態を言う。この近視の状態にある人間の見え方を視力の良い人間に説明するのは難しい。だが簡単に言うと、近視が進んでいくとだんだん物の輪郭がぼやけていき、やがて私の進行度だと裸眼では色や光の方向が認識できるのがやっとになる。近視は凹レンズによって矯正することができるものの、視力の低下がより激しくなるとゆくゆくは眼に合う度数もなくなり眼鏡でも矯正できなくなるらしい。このまま近視が進めば、やがて私の眼は何も見えなくなるかもしれない。現段階では眼鏡の度数が合うことである程度は見えているが、近視が進行しているであろうことは私にだってわかる。ある日突然何も見えなくなるのは怖いが、私にとっては身近な話なのだ。

「見えなくなる」とは、どういうことか。

「見る」と「見えない」の境界線は実はかなり曖昧である。例えば私と他の誰かの目の前に林檎が一つあったとする。それが「林檎」だとして私の目に映って見えていたとしても、他の誰かの目には「赤い何か」とか「球体」としか認識されていないかもしれない。それはその誰かには林檎が「見えていない」のと同じだ。

人間が外界から得る情報の約8割は視覚情報である。その視覚情報が他人と全く同じであるかどうかは、この例が示すように必ず同じとは限らない。他人と見た物の情報を完全に一致させることは不可能である。自分と他人では目のつけどころや視線の注ぎ方、物を見たり考えたりするときの立場が違うように、視覚情報での見え方の判断の仕方も十人十色だからである。



高校1年生の時、授業で美術館鑑賞会に参加した際、モーリス・ルイスの「デルタ・ミュー」という作品について話し合ったことがある。その作品は横に広がる大きなキャンバスの左右に何本かの色の柱が半弧を描くように垂れ流れるようにして描かれているものだったが、私にはただ幾つかの色彩がアーチ状になって走っている虹のようなものにしか見えなかった。しかしある友達曰く、それは「ピースサインをした時の指紋の一部を切り取ったもの」に見えたそうだ。そんな見方もあったのか、どうやったらそんな見方ができるのだと、当時大きな衝撃を受けたことは今でもはっきりと覚えている。

物を「見る」ことと物の見え方は同じではなく、寧ろ全く異なるものなのである。

美術は自己を主張するためではなく他人から共感を得るためにある。自分の存在をアピールするだけなら美術じゃなくても出来るが、その主張で他人に意味をのみこんで理解してもらい、それを心から受け入れて納得されて共感を得ようとするために工夫を凝らせるのが美術だ。しかし、ひとつの作品でどれほど多くの人から共感を得ることができるだろうか。もちろんどんな人間からも同等の共感を得る作品なんてこの世にはないだろう。前述した通り、ものの見方は十人十色だからだ。理解や納得なしに他人から作品を評価されることはない。その作品でどれだけの人を理解・納得させられるかが作り手にとって大きな課題となる。

美術には「見る」ことが欠かせない。「見る」とは、自分の目で確かめ判断することで、自然に目に入った状態の「見える」とは異なる。作り手がじっくりと観察するように描きたいもの、あるいは自己を見なければ作品は完成しない。作品は制作者の小さな分身だ。作者の制作時のすべての技術や感性が作品にそのまま投影されるからこそ、自分について深く知り、心の奥まで見つめることが作品を制作する上で最も重要なことだろう。そしてそれを受け取る側、つまり作品を見る他人がいなければその作品は作品として成り立たない。「見る」美しさを伝えること、それが美術なのである。

私にとって「見る」とは何なのか。

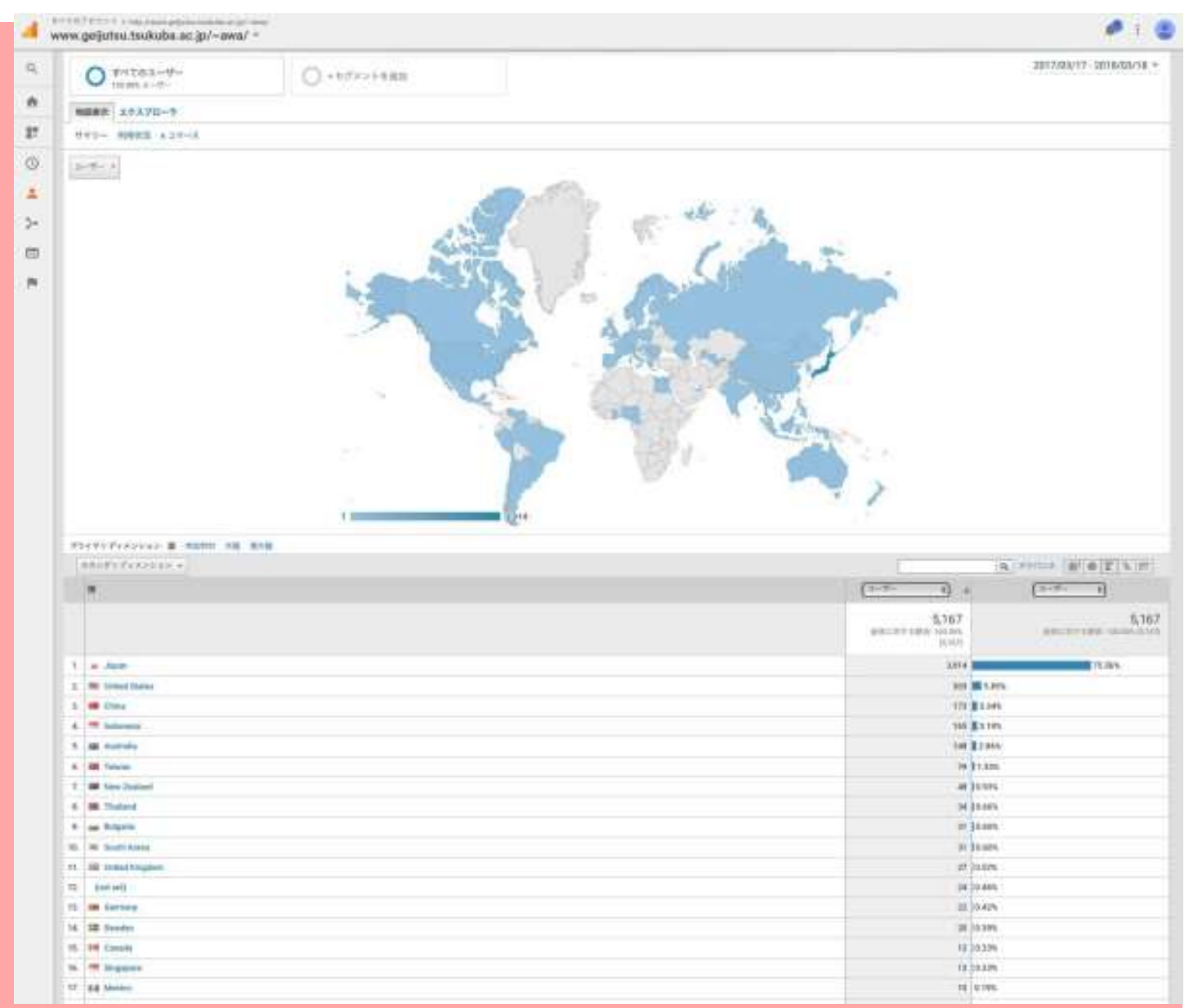
私には「見る」こと自体が生きていることに繋がる。私は「見る」から絵を描くし、絵を描くから「見る」。誰かに何かを伝えて共感を得ようとするから、自然と物を「見る」し、自分にとってどんな伝え方ができるだろうかと自己を見つめ、絵を描いたら誰かとその感情を共有したいのだ。

私のように輪郭がはっきり見えない人は、多くないのかもしれない。視力が失われてしまうのは恐ろしいが、はっきり見えないから見えてくることもある。はっきりしていないから、自己を見つめなおそうと思うのだ。ゆっくり時間をかけて見ようとされて生まれた作品は他人から共感を得るだろう。

これが、今の私が辿り着ける唯一の「見る」の答えである。

④ 国際展開へ向けて

2019年度開催の高校生アートライター大賞に英語部門を創設し、日本語部門との両輪で、アートを通したコミュニケーション力の育成を地球規模の視点で養う。



前回2017年度は、外国語として日本語を教えている海外の高等学校にも案内を発信。コンテストのウェブサイトへの海外からのアクセスは多かったが、おそらく日本語での執筆が壁となり、海外からの応募は19編にとどまった。

⑤ 評価と支援：今後の発展へ向けて

選考基準

内容面
1. アートに関する自分らしい見方、取り組み方がよくあらわれている。
2. 対象とするアート活動について、読者に伝わるようによく説明されている。
3. 読んだ人の関心を呼び起こし、強い印象を与える。
4. できれば間接的な知識だけより、自分の実体験をもとに述べた方が望ましい。
5. アートに関する基本的知識に重大な誤りがない。

形式面
1. 文章の流れが一貫し、伝えたいことがよくわかる。
2. 自分の考えと、それを裏付ける具体的な事実の記述との対応がとれている。
3. 調べた知識や引用と、自分の体験や考えとが明確に区別して書かれている。
4. 日本語表記に重大な誤りがない。

ただし、形式面より内容面を重視する。

前回、学生選考委員に示した選考基準。英語部門での基準をどうするかが今後の課題である。

前回、第一次選考通過者154名に送った励ましメッセージの例。学生と教員が協力して作成した。

Difference

企業研修とのリンク：世界の若者が書いたアートに関するエッセイの選考に携わり、多様な価値観に触れることができる。
産業とのリンク：AI を活用したエッセイの評価は可能か。

高校生アートライター大賞公式サイト

連絡先　①研究内容：直江俊雄　naoe@geijutsu.tsukubai.ac.jp
②産学連携：河野良治　kono.ryoji.fu@un.tsukubai.ac.jp
③事務局：産学連携企画課　tlo@ilc.tsukuba.ac.jp